

# 定義温泉の「扱い人」における看護

## Nursing in “Atukainin” of Jogi Onsen.

黒 木 雅 美 ・ 阿 部 幹 佳

KUROKI Masami,

ABE Mikika

キーワード：仙台市，精神病患者，定義温泉，扱い人

Key words：Sendai City, Mental patient, Jogi Onsen, Atukainin

### 要 旨

日本の精神医療の発展は、明治新政府の発足より始まるが、地方都市である宮城県仙台市においてはその発展が遅延して、民間における治療が行われてきた。「定義温泉」は陸前國宮城郡大倉村（現、宮城県仙台市青葉区）にあり、1864（元治元）年に宿が構築され「山中の癲狂院」と称されて、精神病患者の湯治場として東北各地より精神病患者が参集していた。その温泉の湯温は低温で、当時の近代精神医学における「持続浴療法」に酷似しており、長時間湯に浸かることで、精神興奮状態の鎮静化をはかることができ、民間の治療の場として評価がされていた。そして、定義温泉における回想録より、精神病患者の介抱者としての「扱い人」による看護が行われ、食事の世話や排泄の援助、暴れる患者への処遇などを行い、治療の一端を担っていたことが明確になった。

### Abstract

The development of psychiatric medicine in Japan started with the inauguration of the new Meiji government, but the development was delayed in Sendai City, Miyagi Prefecture, a local city, and treatment was provided in the private sector. “Jogi Onsen” is located in Okura Village, Miyagi County, Rikuzen Province (now Aoba Ward, Sendai City, Miyagi Prefecture). The inn was built in 1864, and was called “Sanchu no Tenkyoin”. Psychiatric patients from all over the Tohoku region gathered as a venue. The water temperature of the hot spring is low, and it is very similar to the “continuous bath therapy” in modern psychiatry at the time, evaluated as a venue. Nursing was provided by “Atukainin” for the mentally ill, and they played a part in the treatment by taking care of meals, assisting with excretion, and treating violent patients.

## I. はじめに

日本の精神医療は明治政府が西欧医学の採用を決定したことにより激変し、明治7年に「医制」が東京、大阪、京都に発行され衛生行政が始動となる。そして、精神医学の知識が導入され、大学において精神病学の講座や、癲狂院をはじめとする収容施設が整備されることとなる [1]。それ以前における精神病患者への治療の起源としては、霊験ある寺院・神社において僧侶や陰陽師による加持祈祷や灸・漢方薬治療、または霊水による飲水・灌水や灌瀧による「水治療」[2] が行われていた。そして、その治療を施していた寺院・神社やその周辺の旅館などが精神病患者を収容するための民間の療養施設（以降、民間施設）となり、周囲より人里離れた場所で治安維持の観点より精神病患者の狂乱時などの隔離・監置が行われていた。これらの民間施設の一部から明治期以降に精神病院へと転化し、1900（明治33）年の「精神病患者監護法」の成立により、精神病患者への近代的精神治療を担うことにつながっていった。これらの収容施設は全国に分布されており [3]、宗教的な要素が強く「清める」といった旨趣より、人間にとり憑いた「悪霊」や「物の怪」といったものから清浄するために、加持祈祷が治療として行われていた。

精神医療の成立過程においては各道府県の独自性があり、東北地方の宮城県においては中央政府より遠く、積雪寒冷地という厳しい自然環境に加

えて、毎年のようにおこる自然災害 [4] に悩まされ、明治年間では災害を防ぐ手立てのないままに被災が連続している状況にあった（表1）。また、軍事力の強化と産業の発展を推し進めていた政府にとっては、地方における官費節約を徹底していた結果として、近代化が進まない状態にあり、精神医療の発展も遅れていた。宮城県における精神病患者の収容施設として、湯治場における温泉療法が行われていた経緯があり、陸前國宮城郡大倉村（現、宮城県仙台市青葉区）の定義温泉が精神病患者に対してその役割を担っていたとされ、東北各地からも多くの精神病患者が参集していた [5]。寺院や神社における宗教的な要素は言及されず、入浴による療養として「持続浴療法」[6] が精神医学の治療として高く評価されている。また、精神病患者に対しての介抱の者として「扱い人」[7] が存在しており、精神病患者への治療の担い手であったとされている。

そこで本稿では、定義温泉における精神病患者の治療の場において、世話を担っていたとされる「扱い人」による看護について明確にすることを目的とする。

## II. 方法

明治期を中心に日本の精神医療・看護の歴史的变化遷を概観し、選定した史資料を精読、宮城県仙台市における精神医療の変遷および、それに伴う精神看護に関する記載されている内容について解釈・検討を行い、その成立過程について叙述する。

表1) 仙台市における明治期の自然災害年表

年	種別	出来事
1869（明治2）	冷害・凶作	秋、冷害のために凶作
1889（明治22）	水害	暴風雨のため河川の氾濫。
1896（明治29）	地震	明治三陸地震津波（三陸沖，M8.2）
1897（明治30）	地震	大地震（宮城県沖，M7.4）
1905（明治38）	冷害・凶作	夏、冷害により米の大凶作により米価高騰。
1910（明治43）	水害	台風による大雨で市内約1,300戸が浸水。

作成：黒木

本研究に対象とする史料は、全て公開させている出版社・公表されている史料を使用し、著作権を侵さないこと、記載されている対象者の人権や名誉に対して十分に配慮する。

### Ⅲ. 結果

#### 1) 定義の地と温泉の成り立ち

定義は、広瀬川支流の大倉川上流にある奥羽山脈の山間部落にあり、源平合戦の後に逃れた平家一族である平筑後守貞能が、本尊の阿弥陀如来の画像を祀り平家一族の冥福を祈ったとされる土地であり[8]、貞能（さだよし）の名より定義（さだよし）を音読みにして「じょうぎ」とし、その後「じょうげ」と称されている。阿弥陀如来像は平重盛が支那（宋）の育王山経山寺に祈願のために黄金を献じて送付を受けた霊軸である。重盛は1178（治承2）年に、死期を悟り貞能にこれを託した。平家滅亡後に貞能は剃髪して「肥後入道」と称して供養を続けた。貞能は1198（建久9）年に没し、その亡骸の上に小堂を建て、尊軸を奉納させたことが定義如来（正式名称は浄土宗極楽山西方寺）の由来とされている。そして、定義如来から西へ3km[9]ほど山奥にある一軒の宿屋が定義温泉であり、定義如来との直接的な関係はない[10]とされている。

定義温泉は陸前國宮城郡大倉村にあり、有田

[11]の『宮城縣温泉小誌』によると開湯の由来は、寛政年間（1789-1801年）とされ黒川郡今村の早坂新四郎が霊泉の開鑿に従事したが途中挫折したとされている。文政年間（1818-1830年）に羽州（山形県）東根村の一農夫が数年間眼病を患い、百の薬も良医の治療も効果がなかったので、同県の八聖山に祈ったところ神託があり「汝か病は医薬の良く効かず、白髭山の御澤の内、定義如来の温泉を浴すべし」とのお告げがある。農夫が夢から覚めて不思議に思ったが温泉に行き入浴してみたところ、3週間もしないうちに眼病が治癒したとされ、この温泉を名付けて『如来夢想の温泉』としたとされる。そして、『如来夢想の温泉』として大倉村の結城藤蔵が開鑿に従事するが開湯することなく中止となり、関新門、庄子平吉が相次いで起工したが成功には至らず、今の湯守である石垣加茂助が開鑿に尽力をつくして岩を裂き石を截って、1864（元治元）年春に浴湯を完成し、「此地頗る僻遠に属し旅店は湯守の一戸のみあり」（図1）とある。

宿の構造は、『宮城県鉱泉志』[12]によると、大倉川の支流である湯川の岩石から湧き出ている温泉があり、掘削して浴槽をつくり湯殿とし、さらに床を掘って余った湯を流して滝湯として局部に充てるようにしている。浴室と客室は渡り廊下でつながっており、渡り廊下の下には谷川が流れ、

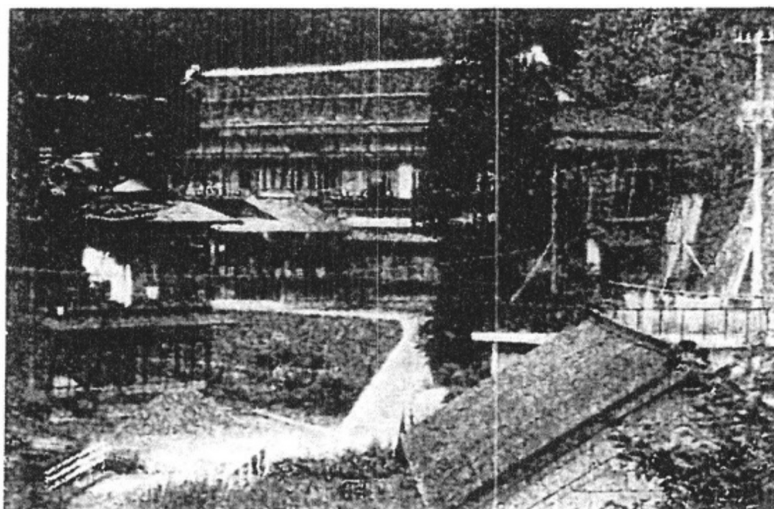


図1) 定義温泉遠景

石井厚「日本精神医学風土記 - 第2部 第2回宮城県」[7]より転載



その上流には3段に連なる滝があり空気が新鮮で、温泉の泉質は無色透明で温度は低く、冬場は加温が必要である。宿は1軒のみで、客室は48室あり、1度に200人は入れるが狭いとは感じられないとある。また、湯殿の横には祠があり湯神を祀っていることがわかる（図2）。

## 2) 民間施設としての定義温泉

民間の収容施設である定義温泉における精神病患者の持続浴について、中村〔13〕は『山中の癲狂院』として、「定義温泉には狂人が澤山入つゐると聞いて来ただけに、何處となく陰氣臭い。…(略)…何時の頃からか脳病特に精神病に効驗あることが評判になつて、定義の氣狂湯などよばれるやうになり、今では主として頭腦に疾病ある人が集まつて来るやうになつたと云ふ。僕考ふるに、湯が此の温さでは一旦入ると容易に出る氣にならない。従つて浴客はどうしても長湯をする。其れが知らず、學理に適つて、(精神病學上、微温湯の持続浴は諸種の興奮性患者に對し、最も確實の効

驗ある物理的療法と認められてゐる) 病氣に好い結果を齎すことゝなるに相違ない。今では其の經驗上浴客は誰でも、「どうも此の湯は長く續けて入つてゐるほど善いやうでがすな」などと話し合つてゐる。」と記載があり、仙台近郊より精神病患者の行く湯治場としての評判があり、定着していたと述べている。

また、呉の『精神病患者私宅監置ノ実況及び其ノ統計的觀察』において、1917(大正6)年に下田〔14〕は、定義温泉の視察し、その内容を報告している。「温泉ノ自然温度攝氏三十七度即チ専門家が持続温浴療方ニ最適當トスル温度ニ全ク一致スルハ奇ナリ。此温泉ガ精神病ニ奏效アルコトハ既ニ五十年前認メラレ、現今ニテハ此地方ニ善ク知ラレ、近縣ノ精神病患者モ此所ニ來集ス」、「是等ノ精神病患者ニハ大抵二三ノ家族ガ附添ヒ來リ居テ、ソレ等ノ男女ガ病者トトモニ入浴ヲナスノハ狀ハ甚ダ奇觀ナリ」、「附添人モ共ニ湯槽中ニ居ルコト、浴槽ノ非常ニ廣キコト、患者ニ安心ト興味トヲ興フルモノノ如ク、入浴ヲ厭フ患者ハ一人モ之ヲ認メズ」、「定義温泉ハ精神病患者ノ民間水治療場トシテ理想ニ近キモノトス」と述べている。

精神病患者への介抱者としての「扱い人」について、昼田〔15〕は当時の様子を定義温泉当主である石垣幸一氏と、宮城県長老連副会長の早坂寛蔵氏からの聞書としてまとめている。

「東北地方、特に宮城県、福島県、山形県で、少なくとも明治のころにはすでに“氣ちがいの湯”として広く知られていたようである。早坂氏も「頭の病氣に良いというのは、すでに明治のころには言われていたんじゃないのでしょうか。」と言う。

石垣氏の話の要約として、「明治の末頃から定義温泉は“頭に効く”と言われて患者が集まり始めた。それまでは、ほとんど知る人もいない湯だった。それが口伝えに伝わったものだろう。…(中略)…福島、山形からの客が多い。それに宮城、岩手、東京からも来る。」と述べている。

## 3) 定義温泉の「扱い人」における看護

昼田〔16〕によると、「入浴法といて、特に



図2) 定義温泉附近風景  
永沢小兵衛「宮城県鉾泉志」〔12〕より転載

決まったものはないと言うが、一種の「持続浴」といえる。八時間から九時間位ブツ通しで入浴させ、それを一週間から、長くて二、三ヶ月続ける。興奮の激しい場合には縛りつけて、糞尿たれ流しのまま一週間位程入れておくこともあった。この場合は「扱い人」と呼ばれる看護人がつき、食事を与えた。」

「荒い患者には二人付添がついたんだね。まあ、病院といった方がいい温泉ですね。…（中略）…派手に暴れる患者さんは結えて動けなくして入れる。湯壺におにぎりをもって行って、食べさせながら入れたんだね。その位するとガオッて（疲れて）来て、やがて落着くんだね。あきが来るとかはないんだね。冬には肌着をつけて入るんです。十二畳二つ位の男女入れたんです。ズラツと並べて入れたんですね。家族も一緒に入ってね。荒い人には付添がついてね。二人ばかりの男の付添が居たんです。えゑ宿にね……家族だと、どうしても手心を加えるって訳でもないんだけど、患者が言うことをきかないもんだからね……荒い患者は小さい風呂、そうさね、三尺四方位の風呂なんだけどね、そこに入れて手拭を頭にかぶせて、ここに〔後頭部〕水をかけたんだね……」（早坂氏）

また、石井〔17〕も定義温泉について、昭和16年ころの精神病患者の妻からの話として、「付き添いの男の人が2人いて四六時中ついてみっていた。そのうちおとなしくなると、湯治場にうつぶせにして、付き添い人が小桶に湯をくんで首筋の所へ湯をたたきつけるように、皮膚が赤くなる程かけて、1時間も治療した」とある。

橋本〔18〕は、定義とうふ店店主の庄司今朝之進の話として、「柔道をならった強い人が温泉に患者を入れる役をしていた。“扱い人”，“お助けさん”，“おやぶんさん”，などと呼ばれていた。扱い人は、ふつうの浴槽につかっていた。縛られた患者が浴槽に大便をすると、扱い人が来て、水を抜いた。扱い人が手当てをすることもあった。例えば、水に電気を流してそこに足をつけるとか。」と述べている。

## Ⅳ. 考察

### 1) 精神病患者の治療の場

日本における「水」による治療の根源となるものは、人間の生命維持において不可欠な基本的物質であり、このことが基盤となって「霊力」や「浄化」に結びつき、水信仰における「治療力」は、精神病患者における「悪霊」や「物の怪」といった身体に取り付いたものを体内から「洗い流す」ための手段として、精神病患者の治療に用いられ、「清め」の作用を期待するものであったと考えられる。さらに、「水」による「温度」と「流力」による効果としての滝治療があり、精神病患者の興奮状態時の鎮静化を図る手立てとして、ある一定の速さで流れる冷水を浴びることによる、一種のショック療法的な側面が示唆できる。一方、「水」によるリラクゼーション効果を期待するものとして「温水」による治療としての湯治浴があり、疾病一般においても確立がされている〔19〕。こうした民間の精神病患者の治療の場は全国各地において古来より存在し、江戸時代より僧侶や神官による祈祷が行われ、修験道者〔20〕が治病を担っていたことに繋がる。

修験道は、いわゆる山岳信仰であり、古来より霊地とされる山の中での修行を積み「験」を修めた優れた密教僧のことであり“山伏”と称される場合もある。「験」とは、様々な経験や神仏の教えを自身の力として修めたことにより、自然の力を用いての加持祈祷を行うことで効能を担うことであるとされる。この、修験道の地こそ精神病患者の治療の場となり、急性症状にある精神病患者の鎮静化や隔離をおこなう場所であり、霊力による癒しを求めて家族も含めて参拝していたのである。そして、修験道の修行のひとつである水行が、精神病患者の水治療として滝治療（灌瀧）が行われてきたと考えられる。

小林〔21〕は、「明治以前の精神病治療所」として、全国で25ヶ所の民間施設を挙げ、うち18ヶ所の施設において水治療が行われていたとしている。しかし、史資料からの裏付を欠くもの

が多く、その沿革は不明瞭なものが多い（表2）。また、呉〔22〕〔23〕の調査では「医療上ノ目的ニアラザル精神病者収容所」として、「各府県ヨリ答報ヲ得タル」施設としては21ヵ所の寺院・神社の記述がある。そして、それらの「民間施設」の概要として、当時の参籠者の様子について述べている。それによると、精神病者は家族または関係者に引率されて寺院の所在地に行き、その付近の旅館に宿泊する者や、多くの場合は参籠所に宿泊しているとある。この参籠所は精神病者だけを収容する場合と、他の疾患の者も共に宿泊する場があり、一定ではなかった。つまり、こうした施設における趣旨は各所で異なっており、土地柄や宗派の違いも関係していたものと考えられる。治療法においても、加持祈祷や説教、講話などを行う場合や、作業療法的に日々の日課として、炊事、裁縫、掃除、風呂焚き、薪集めなどを行っている場合もある。いずれの場合においても、その多くは灌水や灌漑といった水治療法があり、飛瀑

に頭部や背部を打ち付ける方法が非常に多い（図3）。こうした「民間施設」の場合は、全国各地に



図3) 滝場

呉秀三「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」〔14〕より転載

表2) 明治維新以前の水治療施設

名称	場所	宗派	備考
岩倉大雲寺	京都	天台宗	冷泉天皇妃（985） 後三条天皇皇女（1072）
高尾山楽王院	東京	真言宗	「二軒茶屋」（江戸期）
鉄塔山天上寺	岐阜	天台宗	山本秀詮（1863）
阿波井神社	徳島	？	水行（1820-？）
岩屋山志明院	京都	真言宗	「脳薬師」「飛龍の滝」
大日堂	京都	真言宗	現存せず
清水寺	京都	北法相宗	「音羽の滝」
浅山不動尊岩滝寺	兵庫	真言宗	「香良の滝」
阿波井神社	淡路島	？	水行（？）
霊沢寺	福井	真言宗	「不動瀑」
大岩山日石寺	富山	真言宗	大岩不動
秀巖山大福寺	群馬	天台宗	榛名山麓・滝不動堂
仙滝山竜福寺	千葉	真言宗	「岩井の滝」（大滝）1840（？）
向昌院	山梨	曹洞宗	「藤堡の滝」（1764-？）
明浄院	山梨	日蓮宗	「白糸の滝」（1950）
油山寺	静岡	真言宗	「るりの滝」
穂積神社	静岡	？	湯祈禱（？）
定義温泉	宮城	－	江戸期以降（1818-？）、温泉療法

小俣和一郎「精神病院の起源」〔3〕より転記



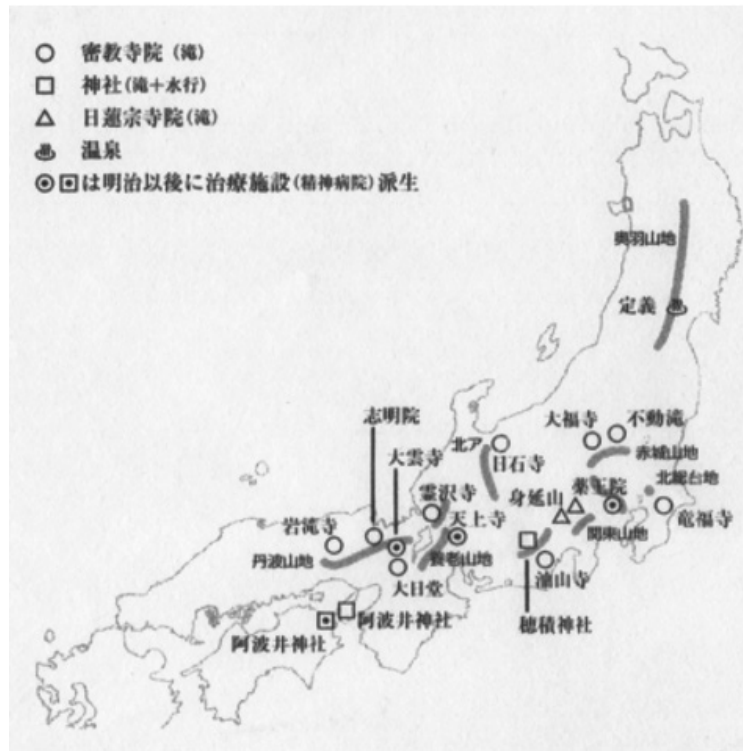


図4) 明治維新以前の施設／全国  
小俣和一郎「精神病院の起源」[3] より転載

点在してみられ（図4），明治期以降には精神病治療施設として派生していくことになる。

その民間施設からは明治以降に精神病院に転化[25] していくものもあった。たとえば，京都岩

## 2) 定義温泉とその看護

定義部落は，広瀬川支流の大倉川上流にある奥羽山脈の山間部落にあり，平家の落人伝説と深く結びつき，平家の冥福を祈り尊軸の奉納したことが定義如来の由来とされる，信仰深い土地である。付近にある定義如来との直接的な関係はないとされ[24]，寺院・神社より派生されたものではないことが窺える。そのため，加持祈祷といった宗教的な要素はなく，また修験道的な灌瀧も行われていなかったと推考できる。そして，湯殿の横に祠があり湯神を祀っており（図5），温泉の環境としては非常に風光明媚で，奥深い山狭部にあるため閑静で精神病者の療養の場としては適した土地であったといえる。

このような民間施設は全国的にみて18世紀後半頃より，精神病者の治療の場としてあった漢方治療や瀧治療を起源とする寺院・神社やその周辺にあり，家族以外の者が精神病者の介抱を行い，



場浴内窟岩泉温義定

図5) 定義温泉岩窟内の浴場  
中村古峽「仙南仙北温泉遊記」[13] より転載

倉大雲寺周辺には患者の預かり所として「茶屋」が形成され「強力」[26]と呼ばれ、身の回りの世話をする介抱人が存在している。また、富山県大岩山日石寺においても、「強力（合力）」[27]が「水治方」として病者を瀧に連れて行き、興奮する場合は手足を縛って「瀧瀧」の介助を担っており、家族では手の付けられない状況にある病者に対しては、他者の力を借りその抑制的な役割が行われて、狂乱時にある病者の鎮静化を図っていたものと考えられる。

定義温泉においては、家族の付添があり共に浴槽に入り入浴することで、精神病者も安心して入浴することができていたとされている。そして、家族が手に負えない興奮状態にある場合などにおいては、その介抱の者として「扱い人」がその役目を担い、暴れる患者に対しては手足を湯船の縁の岩の穴に括り付け、その状態で食事をさせず、体力がなくなるまで湯に浸からせて興奮状態の鎮静化を図り、介抱が行われていたとされる。その際、「扱い人」は精神病者の側に付いて常に観察を行い、「瀧瀧」を思わせる様な治療を行っていたと考えられる。これは、東京府癲狂院で治療として行われていた「瀧流療法」[28]や、1901（明

治34）年に呉が病院長就任後[29]に新しい治療法として導入された「持続浴療法」に該当する。「持続浴療法」[30]は、西欧の理学療法として推奨されていた持続浴を治療法の一つとして取り入れ、興奮状態にある精神病者に対して35℃前後の微温湯の中に、数時間から12時間ほど浴湯させ鎮静化を図るものである（図6, 7）。その看護の方法として清水[31]は、持続浴中は絶えず湯の温度と湯の量を目視して調整し、入浴前後と就寝前には体温と脈拍を測定し、その経過を記載し治療の参考にするとある。定義温泉における入浴は、精神病者の治療方法としての「持続浴療法」に酷似していることから、民間療法としては高く評価されている。

しかし、当時の看護の現状を呉[32]は、「明治年間ニ入りテモ患者ノ待遇ハ甚不完全ニシテ患者ニ三食ヲ給スルヲバソノ主務トセルモノ、如ク、之ヲ壓制シ之ニ桎梏ヲ施シ、極端ニ云ヘバ動物ノ飼養ニモ似タルモノアリト云フ。」と、食事の世話が主な任務であり、拘束具を施し、極端に言えば動物の飼育に酷似するものであると非難している。また、浦野[33]も「東京府松沢病院ノ歴史」として、当時の看護について患者の食事を与え、男女別の病室もなく、掃除は週に1回、排せつ物などで衣服・室内が不潔であっても定められた日まで放置され、看護の専門性はない状態であるとも述べている。このことを鑑みて、定義温泉における回想録より、精神病者に対して介抱者として「扱い人」が行ってきたことは、歴然とし



図6) 浴治法（水治法）その1  
石田昇「新撰精神病學」[30]より転載



図7) 浴治法（水治法）その2  
石田昇「新撰精神病學」[30]より転載



て当時の看護方法に即したものであり、定義温泉において精神病者の治療の担い手であったことが示唆される。

以上より、東北初の精神病院である東北脳病院が、仙台市に1906（明治39）年に開業した以前においては、民間の精神病患者収容施設が存在し、「定義温泉」に精神病患者が収容され、その介抱者としての看護の役割が存在していたことが明確となった。そして、東北地方における精神病患者の治療および収容施設〔34〕としては、中央に比べて近代化の遅れや自然災害の影響などによる経済的な問題も影響して、精神病院の設立は非常に遅れ、そのため精神医療の発展も遅れたといえる。

## V. おわりに

明治期における精神医療の発展と共に、その看護について講究することで、地方都市である仙台市における精神看護の萌芽を顕在化し、その看護について明確にすることができた。度重なる災害や気候状況の厳しい土地柄のために、精神医療の発展は遷延していた状況下にはあったが、精神病患者の治療の場において看護が行われていた。今後は、当時の看護実践における具体的内容をより追求していきたい。

（付記）

本稿は、仙台青葉学院短期大学 令和3年度学長裁量研究費（No.0304）による研究成果であり、日本看護歴史学会第36回学術集会にて発表したものをまとめたものである。

## 引用文献

- 1) 井上俊宏：近代日本の精神医学と法－監禁する医療の歴史と未来－（第1版）。ぎょうせい、東京、2010、pp.3-13.
- 2) 兵頭晶子：水治療と近代精神病学－あるいは、民間療法施設の近代－。精神医学史研究。2007；11（2）：100-107.
- 3) 小俣和一郎：精神病院の起源（第1版）。太

田出版、東京、1998、pp.65-80.

- 4) 田澤薫：宮城県における明治期から昭和戦前まで社会事業施設と団体の形成過程。東北社会福祉史研究。2005；23：36-67.
- 5) 昼田源四郎：「気違いの湯」－定義温泉の歴史聞書。日本醫史學雑誌。1977；23（3）：50-60.
- 6) 呉秀三：我が国ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設。1912：115-116。（国立国家図書館デジタルコレクション）
- 7) 石井厚：日本精神医学風土記－第2部 第2回 宮城県。臨床精神医学。1987；16（2）：237-343.
- 8) 宮城町誌編纂委員会：宮城町誌 本編（第1版）。宮城町役場、宮城、1969、pp.96-97.
- 9) 斎藤茂太：湯舟で祈る湯 精神病の湯〈本誌特派〉山形県の今神、宮城県の定義の湯治客と語った精神医学者。旅。1969；43（11）：64.
- 10) 前掲3）73.
- 11) 有田正誠：宮城県温泉小誌（第1版）。甘泉堂、東京、1882、pp.20-22.
- 12) 永沢小兵衛：宮城県鉾泉志（第1版）。弘文館、宮城、1891、pp.38-41.
- 13) 中村古峽：仙南仙北温泉游記（第1版）。古峽社、東京、1916、pp.175-178.
- 14) 呉秀三、榎田五郎：精神病患者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察、99、1918。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 15) 前掲5）373-374.
- 16) 前掲5）375-376.
- 17) 前掲7）242.
- 18) 橋本明：定義界限－如来、豆腐屋、そして温泉。近代日本精神医療史研究会通信。2006；8：19.
- 19) 前掲）3、48-54.
- 20) 金川英雄：日本の精神医療史 明治から昭和初期まで（第1版）。青弓社、東京、2012、pp.48-60.
- 21) 小林靖彦：江戸時代の精神医学2 治療編。臨床精神医学。1982；11：49-54.
- 22) 前掲6）121-128.

- 23) 前掲14) 87.
- 24) 前掲3) 73.
- 25) 前掲3) 48-171.
- 26) 中村治：洛北岩倉と精神医療（第1版）。世界思想社，京都，2013，pp.20-22.
- 27) 橋本明（編）：治療の場所と精神医療史（第1版）。日本評論社，東京，2010，pp.164-172.
- 28) 前掲6) 69.
- 29) 岡田靖男：日本精神科医療史（第1版）。医学書院，東京，2009，pp.163-167.
- 30) 石田昇：新撰精神病学第六版，100-103，1915.  
（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 31) 清水耕一：新撰看護學（第1版）。南江堂書店，東京，1908，pp.344-347.
- 32) 前掲14) 2.
- 33) 浦野シマ：日本精神看護史（第1版）。牧野出版，東京，1982，pp.44-45.
- 34) 近藤等：日本の東北地方の精神障害者用民間施設. 精神神経学雑誌. 2012 ; 114 (10) : 1187-1193.